

〔好色一代女三〕金紙のヒ髻結

或時雨の淋しく、女交りに殿も宵より御機嫌もよろしく、琴のつれびき遊ばしける時、彼猫をまかけけるに、何の用捨も無く奥様の御ぐしにかきつき、かんざしに小まくらおとせば、略下

〔北里劇場隣の疝氣〕女郎の風俗も、略中 簪とて色々もようをしたるを、七八本さしちらし、祭りに賣歩行だしやら、辨慶の人形やら見わけがたし、略中

女郎の身持昔とはちがひ、せつなきこと多し、略中 今は二人り禿と云へども、我衣類に少しもちがはざるをきせかさね、くし、かうがい、かんざしに至る迄替ることなし、略中 かのかんざしも一本に付、二三分一兩位、略下

〔倭名類聚抄十二〕冠帽具 簪 釋名云、音難、此間云、簪子、上音如才、係也、所以拘冠使不墜也、

〔箋注倭名類聚抄四〕冠帽具 類聚名義抄、簪子訓佐伊之、與此云上音如才合、空物語初秋卷亦有佐伊之、然其音可疑、伊勢本、山田本、曲直瀬本無上音如才四字、

〔玉篇十八〕楚街切、婦人岐、釵也、

〔事物紀原三〕冠冕首飾 釵

實錄曰、燧人始爲髻、女媧之女、以荆梭及竹爲簪、以貫髮、至堯以銅爲之、且橫貫焉、舜雜以象牙玳瑁、此釵之始也、

〔釋名四〕首飾 爵釵、釵頭及上施爵也、

〔類聚名義抄八〕竹入簪子 サイシ

〔伊呂波字類抄左〕雜物 釵 サイシ 簪子 サイシ

〔倭訓栞中編九〕さいし 簪子の音轉也、かんざし也、和名抄に、簪、此間云、簪子、上音如才と見ゆ、

〔空穂物語 初秋二〕夏冬のよそひをすきばこに入れて、そのまきものうへのおほいうへのかみ子せ

釵子
名稱